朝倉震陵の「献功隊奥羽蝦夷出張中風説」記について

会員　清木　素

朝倉震陵は徳山藩の御用絵師の朝倉家五代で、朝倉南陵の三男として生まれた。三郎・喜作・八代吉・牧太と称した。画は文化十四年（一八一七）萩の雲谷等徽方で初稽古し、文政二年（一八一九）更に江戸に上り、江戸での稽古中二人扶持を賜った。谷文晁に学ぶこと七年、この間、父南陵に命じられ江戸の伊能勘解由方で都濃郡栗屋村の絵図を写した。

徳山に帰ってからは南陵の画業を手伝い、天保二年（一八三一）家督を相続、同七年中小姓格に、同九年震陵の号を許され、同十三年雲谷より等・の字を許されて等璘と号した。その後、藩の学館に出講したが元治元年（一八六四）に隠居した。老いて益々盛で明治二年には蝦夷地追討戦に従って色々と日記等記録を丹念に残したが、二年後の明治四年（一八七一）十二月一日七十四歳で没した。

次にその時の記録中、風説聞書に関するもの一部を読解紹介することにする。

献功隊奥羽蝦夷出張中風説　朝倉震陵

明治二年己巳六月八日自東京長浜主税早御飛脚ニテ罷帰節差越候書。朝同六月十九日帰着之由也

拝啓

雲上様益御機嫌宜敷被遊御座恐悦候。随テ総括様ヲ始メ諸君御勇壮御奉職可被遊御座珍重候。次ニ当隊一統首尾能賊平定之巧ヲ遂、此東京表ヘ凱旋仕候間此段御同慶之至奉存候。昨年来之形勢ハ先比信田生帰陣仕候ニ付委細承知仕候其節縷々之芳翰辱拝見仕候。信田生着ハ四月廿一日ニテ既ニ蝦夷地渡海舘村出張中ニテ諸口戦争中ニ御座候。然者此度徒ニ、天朝恐悦之御儀被仰出就テハ幸当地凱旋中且御障モ賜リ候事故凱旋之御届ヲ兼テ長浜主税儀帰国ニ付多忙中真之概略何モ申無候ヘドモ不取敢左ニ申上候

一、当四月六日山崎隊同十五日献功隊青森出艦同八日山崎隊同十六日献功隊両日ニ乙部山崎隊江刺献功隊之両処ヘ上陸迄ニ戦略之別記ニ有之故

一、同五月廿七日函館出帆賊徒平定之上六月朔日着艦同

月四日東京へ凱旋
左之通粗如斯
長浜生暁ヨリ出立昼夜兼行ニ候へ共最早兵隊モ御暇ヲ賜リ候故蒸気船之都合相調次第不日凱旋之積リニ御座候
艦モ今少シ談判未決ニ候、相定リ候ヘバ寸時モ早ク帰国可仕手配仕居候　戦地概略御届書ハ於出先督府尚東京軍務官ヘモ差出シ候儘差送リ候間可然御取斗可被下候様奉希上候　就中林参謀其地戦死誠痛嘆無量奉存候　誠ニ林参謀戦没ニ付テハ生輩モ大キニ力ヲ失候段御推察奉祈上候　乍併此度戦争ハ当隊多年ノ宿志モ相貫旁且林参謀ヲ始メ一統必死決戦之力ニ依リ候事ニテ薩長徳之兵ト並ビ称ラレ候　各藩中ニテモ此度不恥働ニ御座候　此段ハ御安慮且御喜ビ可被下候サレド勝テ兜ノ緒ヲシメヨトノ事一大事御座候ト一統相戒居申候　戦地従初之情実並当隊斗之駆引等定テ早々御聞取被成度候半ト奉察候ヘ共此ハ生輩之凱旋迄ハ御待被下候様奉希候　別ニ戦地之細図ニ至ル迄取揃目出度入御覧可申候　満隊中部而無事銃瘡人モ残ラズ浅手迄ニ快ク御座候方ニ御座候　此段御安慮奉希候　帰国之上確報仕候迄ハ極而流言浮説御信用被成間敷候　且又夫ニ内輪ヘモ安心相成候様御申伝被下度奉希候　戦死之人蝦夷地ニテ江刺ト申処招魂場相開広大ニ相調申候　林参謀其外不残宗藩之分一同相祭リ申候　左候而過日函館ニテ官軍海陸共招魂祭リ賑々敷取行申候　招魂場之一条ハ長浜右之事ニ関候故委細御聞取被下候
別ニ一冊差上候分ハ陸軍参謀ヨリ軍務官ヘ御届申上候分ニ御座候ヘ共是又　高覧ニ備リ候様御配意奉希上候　総括様ヘ別ニ愚翰差出不申候間宜被仰上被下度奉希候　左候而政府中其外宍戸竹内ニモ音向御座候ハバ御申通被下度外ニ御満隊中ハ元ヨリ飯田生田諸君ニモ可然御致情奉希候書外ハ不日帰国目出度凱旋ヲ唱候上ニテ申残候　当地諸々之御留守ヘモ可然御伝達奉希其内辰(時)下御自玉(愛)奉専祈候　草々拝白

庄原　矗允
内山正太郎

招陳

会議所　各中様

再行山崎トモ都合隔意ナク今日迄同居仕候間此段御内意奉希候
最早一向恥ル事モ無之奉存候　当隊之名ニ背カヌ事ハ実ニ至喜至歓御察シ可被下候　別ニ出先ニ於テ迄ニ被仰出御書附大略差出申候　余ハ凱旋之上ト申残シ候

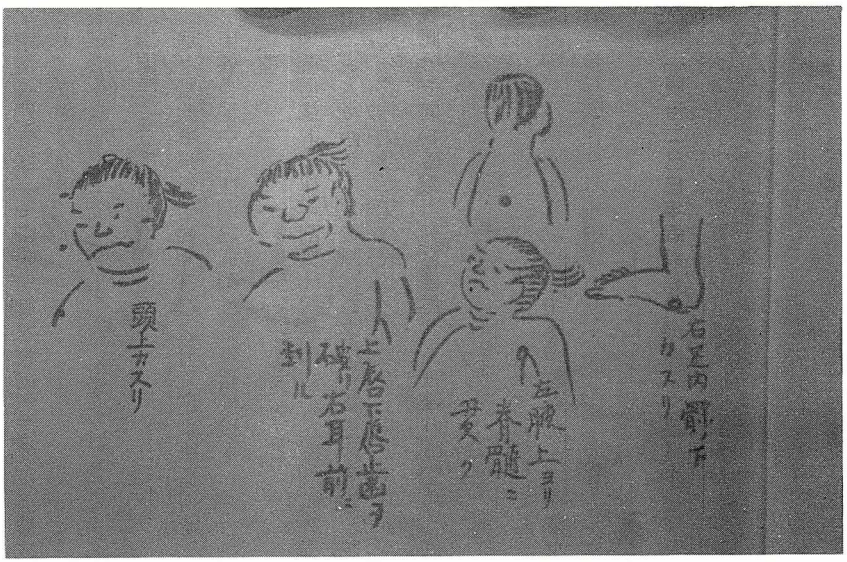

写真 1.　負傷個所の絵図

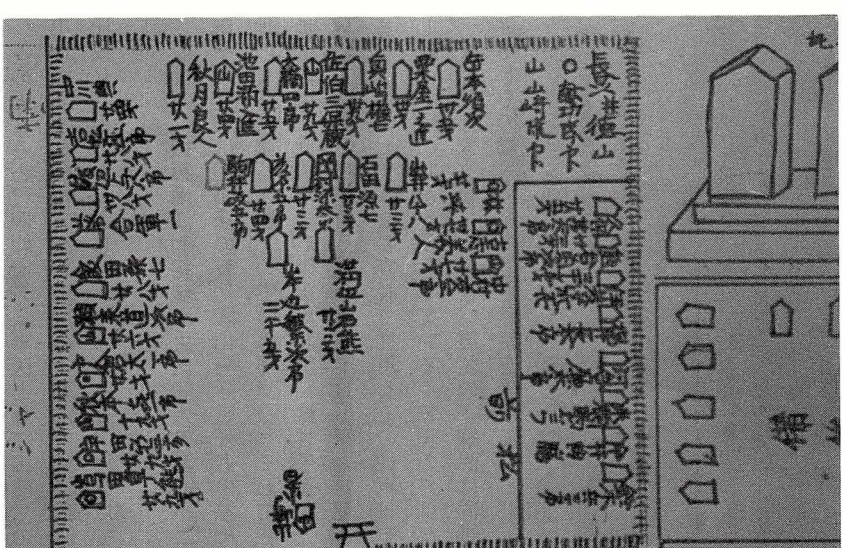

写真 2　江差招魂所（長州並徳山藩関係分）

一、宗藩長門守様ニモ御隠居御家督御首尾能御済被成候
　テ官位御昇進也
一、長府侯モ御高二万石御増
一、岩国侯モ五千石御増高也
　追々賞典モ挙行申候今日迄之分荒増（アラマシ）別紙買得サシ上
　申候多忙中略挥（記）例之通御推読奉希候以上
　追啓
蝦夷地茂呂（モロ）欄（ラン）ト申処ニ割拠仕居候津太郎左衛門賊ノ奉行
以下三百人モ函館平定後降伏右之湊ヘ繋泊仕居候　賊艦
長鯨丸ハ多分沈没カ又ハ蝦夷之端漂流仕候哉ト申事ニ御
座候此分モ何レ確報可有之候得共為差事ハ無之事ニ御座
候
　七日夜
函館為守兵ハ伏水大隊之内一中隊津軽松前一二中隊ヅツ
位外ニ新兵隊在住隊一中隊ナリ

次に**「明治二己巳年蝦夷戦争概略」**を述べ終わり大鳥圭介（陸軍奉行）陣門に降伏のこと、武装解除の書附を渡したことなど記している。

その後は戦争概略として死傷者の状況を絵筆を用いて画いている。（写真1）

このところと、四熊直方（軍医として出陣）の「蝦夷地戦争銃瘡療治覚」（新南陽市土井四熊雍子氏蔵）と比較して見ると一致したところもあり、絵を以て説明しているところもあり、わかりやすい。

最後の**「蝦夷地江刺（差）招魂場之図同六月写七十二翁震陵」**によれば徳山藩の献功隊山崎隊戦死者の墓碑が現地のままに画写されている。（写真2）そして「蝦夷地理之図（此図嘉永七甲寅夏北筑結城甘泉識）」を模写して付録としている。明治四年七十四歳で没しているが、当時七十二歳の高齢で従軍しその従軍日記を残し絵図でその状況を明示している点驚嘆の外はない。

また朝倉家文書によると、震陵の子練治は同戦争に従軍しその働き奇特に付き感状を受けている。

（本誌P・30参照）